

# 奄美群島のノロ遺品にみる大袖衣の意匠

多々良 尊子

## 1. はじめに

奄美には、女性が兄弟を守る霊的な存在であるというオナリ信仰があり、ノロと呼ばれる神女が地域の祭祀を司っていた。15世紀末から16世紀初頭には、琉球王国で中央集権制度に組み込まれた神女組織が確立した。集落ごとのノロ、その上に親ノロなどがいて、先祖供養や農耕儀礼・防災儀礼など年間の様々な行事を行い、地域を取りまとめていた。集落内または親族の女性に代々受け継がれ、琉球王府から辞令書とともに衣装などが下賜された。1609（慶長14）年の薩摩藩琉球侵攻以降は、琉球王によるノロ任命や迷信が禁止されたが、集落ごとの祭祀は続けられた。さらに、明治初期の廃仏毀釈による弾圧、第二次世界大戦とその後のアメリカ軍の占領による混乱を経て、簡略化されながらも昭和40年代までは伝統文化として各地で祭祀が行われていた<sup>1)</sup>。

ノロが用いていた祭祀具や衣装は奄美群島の各地で伝承されている。「奄美大島のノロ関係資料」「喜界島のノロ関係資料」が鹿児島県の有形民俗文化財として指定されているほか、市町村の文化財に指定されているものも多い。ノロの遺品として、

文 書：ノロ辞令書

祭祀具：神扇、サハリ〔鉦〕、銅鏡、刀、香炉、酒瓶、櫃、太鼓

装身具：ザバネ〔羽飾り〕、ギィファー〔簪〕、神サジ〔鉢まき〕、櫛、かもじ、首飾り、玉ハベラ〔玉ハビイルとも表記する。背垂れ貫き玉〕、勾玉

衣 装：胴衣（どうぎん、どうじん）、下裳（かかん）、大袖衣（おおそでぎん、うふそでじん）、上衣、長着、帯

などが挙げられる。その中で、ノロの衣装については、薩摩藩侵攻以前に琉球で製作されて下賜されたものと、その後、奄美で製作されたものに大別される<sup>2)</sup>。歴史的な背景から、琉球と日本本土の両方の衣生活文化の影響をうけ、奄美独自の様式が見られる。また、一般の衣服は着用することによって消耗し、何度かの仕立て直しの後は断片となり、後世に残ることは少ないが、ノロの衣装は神聖なものとして代々受け継がれてきた<sup>注1</sup>。400年以上前に製作されたと推定されるものもあり、服飾史上、貴重な資料である。古い時代に琉球王府からもたらされた衣装は、中国の服制に倣ったものではあるが、琉球の文化と融合し宗教的な価値を伴って奄美に伝えられてきた。中でも、華やかな胴衣（一例として、写真1-1～1-3に大和村のノロ遺品を示す）と下裳は、高松塚古墳の壁画に描かれた古代の衣装の構成をとどめていることから、服飾史上の貴重な資料として研究されてきた。一方、大袖衣（一例として、写真2に瀬戸内町立郷土館に収蔵されている大袖衣を示す）についてはあまり着目されてこなかった。無地のシンプルな構成で、布の分量だけが目にとまり、単なる大きな着物という印象が拭いきれないためかもしれない。ノロの衣装の着装法では、胴衣の上から大袖衣を羽織るため、華やかな胴衣を無地（白または濃藍）の大

注1 ただし、ノロが亡くなると神衣を着用した姿で埋葬される習慣があり、古い衣装がほとんど残っていないという地域もある<sup>3)</sup>。

袖衣で覆ってしまうことになる。また、宗教的な意味を排除して単にファッションとしてみても、窄衣<sup>注2</sup>である胴衣と寛衣<sup>注3</sup>である大袖衣の組み合わせは、バランスを欠いたコーディネートである。しかし、格式が高く、非常に高品質な素材が用いられ、本土の時代衣装と類似した技法で仕立てられている。奄美の最もフォーマルな衣服として位置づけられ、現在も地域の祭礼で着用されている神衣装（長着の上に羽織る白衣）の起源でもある。



写真1-1 御簾扇花流水胴衣  
丈75.7cm, 衿68.8cm  
(東京国立博物館列品番号K-39057)



写真1-2 松皮菱菊紋胴衣  
丈77.7cm, 衿68.0cm  
(東京国立博物館列品番号K-39059)



写真1-3 ハビィラハギ胴衣  
丈76.0cm, 衿61.0cm  
(東京国立博物館列品番号K-39056)



写真1-4 チョーギン  
丈149.0cm, 衿73.7cm  
(東京国立博物館列品番号K-39091)

写真1-1～1-4は、大和村の太（ふとり）家伝来の衣装である。太家の祖先は、琉球王府から親ノロに任命されていた旧家であり、貴重な遺品を受け継いだ郷土史家の長田須磨が東京国立博物館に寄贈したものの一部である。鎌倉芳太郎による1926(大正15)年の調査<sup>4)</sup>では、写真1-1は琉球の筒描染め羽二重、写真1-2は中国の明時代の錦、写真1-3は室町時代の名物裂を三角形にして接ぎ合せたものとされている。写真1-4はノロの衣装ではなく、いわゆる「御目見え衣装」の朝衣（ちょうぎん）である。  
(東京国立博物館情報アーカイブ <http://webarchives.tnm.jp> より転載)

注2 窄衣（さくい）：人体に合わせた立体的な形態の衣服

注3 寛衣（かんい）：ゆったりと全身を覆う形態の衣服



写真2 瀬戸内町立郷土館のノロ遺品

大袖衣、水晶玉、首飾り、玉ハベラ、線香立て、サジ、ミガキ〔神扇〕等が展示されている。大袖衣は、益村家（瀬戸内町久慈）伝来の「絹平織流水樹木花葉型打広袖表着」である。寸法は表1に示す。



図1 首里王府内婦人の図

江戸時代中期の士族女性の服装を描いたもの。左は胴衣と下裳、右は胴衣と下裳の上から大袖の表着を打ち掛けている。『江戸立之時仰渡並應答之條々寫』（1712年）

そこで、本報では、奄美群島においてノロの遺品として伝えられてきた大袖衣の寸法、縫製方法、素材などを調査し、その結果をまとめるとともに、琉球の神衣と比較することにより意匠の特徴を考察した。

## 2. 本土における大袖衣装の変遷

日本の古代の衣服は貫頭衣であったが、奈良時代には、衣禪（きぬはかま）・衣裳（きぬも）となった。二部式で、上衣は盤領<sup>注4</sup>・筒袖で丈が短く、下衣は男性が幅広のズボン、女性がひだつきのスカートの組み合わせであった。人物埴輪や高松塚古墳に描かれた官女の服装が挙げられる。これらは、窄衣であり、北方騎馬民族の服装を起源とし、大陸から伝わったものであると言われている。

平安時代に遣唐使が廃止されると、和様が確立し、衣服の形態はゆったりとした寛衣へと変化する。袖幅・袖丈が長くなり、広袖<sup>注5</sup>となる。特に、束帯や女房装束の袖は極端に誇張され、重ねの枚数と配色が貴族女性のファッションの重要な要素であった。これは、住居が高床式の寝殿造りとなり、室内で靴を脱いで床座で生活する様式となったことや安定した貴族社会が長期間続いて服装が華美になっていったことなどが要因であると考えられている<sup>注6</sup>。

やがて武家社会が成立して、服装が簡略化されるにしたがい、內衣であった小袖が表着となり、一部式の長着の形態へと変化していく。現在では、大袖<sup>注6</sup>の着物としては、神職の装束（袍や狩衣）、僧侶の袈裟衣、有職故実における装束（衣冠、束帯、唐衣裳など）、

注4 盤領（あげくび）：細幅のスタンド・アウェイ型の丸衿。束帯や直衣の衿の形。

注5 広袖：袖丈いっぱい袖口とし、袖下を縫わずに仕立てた袖のこと。または、そのような袖のついた和服のこと。

注6 大袖：幅の広い袖。もともとは、奈良時代の礼服（らいふく）の表着として小袖の上から着用したもの。

能や歌舞伎の衣装などがある。いずれも、特定の領域で伝統的に長く受け継がれてきたものであり、一般庶民の衣服としては残っていない。身幅は一幅、袖は一幅半に仕立てられ、身幅と袖幅の対比により袖を際立たせている。能や歌舞伎の大袖の衣装の立ち姿は美しいが、身幅が狭いため、動作に適合するために闊腋<sup>注7</sup>になっている。それに対して、後述する奄美の大袖衣は身幅も袖幅も広く、特異なプロポーションである。

このような服飾史の流れとは別に、垂領<sup>注8</sup>の大袖衣が正倉院に収蔵されている<sup>注9</sup>。僧服の下着ではないかと考えられている。ノロの衣装の源流と考えるのには無理があるが、広幅の布を無駄なくいっぱい使うという構成は奄美の大袖衣と共通した特徴である。

### 3. 琉球の大袖衣

#### 3-1. 琉球の礼服

中世までの琉球の女性の服装は、胴衣と下裳の二部式であった。胴衣は、垂領で衽のない短衣であり、下裳（かかん、裙とも書く）は細かいひだの入った巻きスカート状の下衣である。下裳の上から胴衣を着用して紐結びし、帯は締めない（図1参照）。本土の古墳時代から飛鳥時代の服装である衣裳（きぬも）と同様の構成であり、中国・朝鮮の影響が大きいことが明らかである。

15～16世紀になると、朝服や礼服として、胴衣・下裳の上から、長着を着用するようになった。形態に男女の違いはなく、広袖で衽がつく。袖幅・肩幅・後幅は布幅いっぱいを使い、衿に布幅15～20cmをとり残りが衽となる。王府に出仕する時の正装として着用される単衣の長着を朝衣（ちょうぎん、ちょうじん）と呼んだ。中国から明時代の寛衣が伝わったという説もあるが、本土の広袖衣装（平安時代の襲装束など）の影響が大きいと考えられている<sup>6)</sup>。

1609（慶長14）年の薩摩藩侵攻以後は、日本の文化との同化は求められなかったが、日本の衣生活の影響を大きく受けるようになった。1645（正保2）年には、大札では朝衣を着用するように定められた。緞子などの高級な織物を用い、琉球刺繍が施された豪華な衣装も残っている。礼服が長衣になるとともに、胴衣と下裳は內衣化した。18～19世紀には、女子の平服は一部式で、現在の琉装に近い構成になった。

琉球における服装が二部式であったのは中国・朝鮮の影響であり、一部式に変化したのは本土の影響が大きい。胴衣・下裳は北方騎馬民族の衣装に由来する窄衣であり、騎馬の習慣や気候条件を考えると、寛衣の大袖に変化するの自然の流れだろう。しかし、琉球の表着は本土の長着と異なる点が多い。構成の特徴<sup>7)</sup>として、

袖：広袖、付け詰めで脇まち[脇やつみ、ワチスビ]が付いているものが多い

身頃：対丈、繰り越しが無い、衿肩あきが小さい、身幅が広く布幅いっぱいにとる

衽：衽下がり短い、衽幅が広い、鉤衽裁ちが多い

衿：広衿、衿下が短い、共衿はつけない、衿つけはじめに付け込みがある

注7 闊腋（けつてき）：脇を縫わないスリット状の仕立てのこと。

注8 垂領（たれくび、たれくび）：肩から前身頃の裾に向かって衿をつけ、左右をV字型に打ち合わせて着装すること。

注9 例えば、「衣（布帛）：布袍第15号」は身丈130cm、袖丈65cm、袖幅58cm、衿118cm、後幅61cmで、衽はなく、衿はかけ衿である。「衣（布帛）：橡布襖子第42号」は身丈115cm、袖丈54cm、袖幅45cm、衿78.5cm、後幅32.5cm、衿下67cm、衿幅11cmで、奄美の大袖衣の寸法に近い<sup>8)</sup>。



図 2-1  
王子婦人大礼服，通常服之図  
(東京国立博物館列品番号A-9891)



図 2-2  
那覇士族婦人通常服之図  
(東京国立博物館列品番号  
A-9893)



図 2-3  
一般平民礼服之図  
(東京国立博物館列品番号  
A-9894)

いずれも第二尚氏時代の19世紀の服装を描いたもの。男子は帯をしめ、女子は打ち掛けまたはウシンチーの着装である。袖が広くて風通しがよく、広帯で体を締め付けることもないので、南国の気候に適している。  
(東京国立博物館情報アーカイブ <http://webarchives.tnm.jp> より転載)

着装法として、男子は帯をしめるが、女子は打掛またはウシンチー〔押貫〕<sup>注10</sup>で帯をしめず広衿を外側に折り返しケーシクビ〔返し衿〕とする(図2-1～2-3参照)。

1872(明治5)年琉球王国から琉球藩になり、1879(明治12)年廃藩置県で沖縄県になると、服装の本土化がすすんだ。和服を着る習慣は広まったが、広袖・対丈の琉装が現在も残っている。

### 3-2. 琉球の神衣

琉球のノロの服装については、既に多くの論考があり(例えば、文献9, 10など)、ここでは概略を述べたい。

ノロの衣装において、表着である大袖衣は、平絹、緞子、絹、芭蕉、からむしなどの素材を用いている。色は白だけでなく、濃藍、赤、紫などがあり、刺繍や型付(型打ち)、手描きなど多様な技法で模様が描かれて華やかな衣装が製作されていたことが伺える。現在では、古裂としか残っていないものも多い。色衣装は、あしやげこむね<sup>注11</sup>に由来するものであるとされている。鎌倉芳太郎によれば、神事の正装は白衣装で、王府出仕の礼服が色衣装であり、豪華な色衣装は位の高いノロのみに下賜されたと考えられる<sup>11)</sup>。また、神事の種類によって衣装の色を変えることや、神事は白衣装で神事後の舞踊等は色衣装に着

注10 中衣(または下着)に細帯(または紐)を締め、その上から表着を羽織り、前を打ち合わせて腰帯にさし込む着装法。

注11 17世紀初めに王女・神女などの大礼服として定められたもので、18世紀には士族の婚礼衣装になった。図3参照。



替えるという事例も報告されている<sup>12)</sup>。1726（享保11）年『伊平屋嶋舊記集』に

「御衣 壱領，但，長五尺貳寸五分，袖の幅貳尺貳寸五分，表は紅之緞子，鳳凰卉いろ  
いろの花鳥，五色の絲ニ而にて織付，うらハ水色之もろ絲絹」

とあり，1470（文明2）年に初代あんがなし<sup>注12)</sup>に下賜された衣装のことが記されている。  
2007年に復元されて沖縄県立博物館に展示されている。着装した姿のスケッチを図3に，  
復元時に採寸された寸法を表1に示す<sup>10)</sup>。

張りのある布をたっぷりと使い，ゆったりしたシルエットであることが上流階級の服飾  
美であり，ノロの衣装もそれに当てはまる。大袖は風を通して南島の気候に適していると言  
われるが，下に筒袖の胴衣を着ていることから，それだけでは説明しきれない点もある。  
袖の主な機能は，腕の動きに対応することであり，大きな袖は日常の作業にとっては不都合  
である。非日常的なデザインとして袖の美しさを際立たせることが神事を特別なものとして  
演出する効果をもたらし，全身を大きく見せることでノロの威厳を高めていたとも考えら  
れる。

明治後期から昭和初期に撮影されたノロの正装（写真3および写真4-1）では，表着  
としてゆったりとした白の大袖衣を着用している。現在まで続いている神事でも白の神衣  
装が着用されているが，布幅が並幅になり，綿やポリエステル混紡のしなやかな素材とな  
り，着装した時のボリュームは大きく変化した。



写真3 北谷ノロ

1903（明治36）年に鳥居龍藏が撮影したもの  
伊波普猷『沖縄女性史』小澤書店（1919年）  
より転載



図3 伊平屋あんがなしの正装

島尻郡伊平屋村の名嘉家に伝わる色神衣装を21代あ  
んがなし（名嘉カメ）が着装した姿を1927（昭和2）  
年に鎌倉芳太郎がスケッチしたもの。紫の上衣，表  
黄裏赤の胴衣，赤の下着，白の下裳と記されている。  
（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）

注12 「あむかなし」とも表記する。琉球王家の女性が任命される聞得大君（きこえおおきみ）の次に格式の高い  
神女。



写真4-1 与喜屋のノロクモイ

1900（明治33）年に沖縄県知事から任命された琉球王国最後のノロである比嘉カマト（中頭郡中城村）が神事の正装をした姿（白の八巻，白の大袖衣，百八の水晶玉，神扇）である。1927（昭和2）年1月に鎌倉芳太郎により撮影されたもの。

（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）



写真4-2 祭祀を行うノロの姿（復元像）  
（沖縄県立博物館民俗部門展示）

### 3-3. 琉縫い〔ウチナー縫い〕

一般的な単衣の琉縫いは、背縫いは一度縫いで、裾の始末をしてから、背縫い、脇縫い、衽つけをしているものが多い。衽は鉤衽裁ちであるが、裏表のはっきりした織物では鉤衽裁ちはできないので、柳衽裁ち、のしめ裁ちなどもみられる。表裏のはっきりしている紅型や花織などは庶民が着用することは禁じられており、王族や士族の着物であれば、用布の節約の意図は考えにくい。縫代のしまつ法として、

耳のまま：背縫い、脇、袖付け、衽下、袖口

袋縫い：衽つけ、袖底、衽つけ

三つ折り縫い：裾、衽下（裁ち目の場合）

である<sup>13)</sup>。琉縫いの古い衣装の裁ち目のしまつは袋縫いとぐし縫いによるものであり、本土仕立て〔大和縫い〕の単衣で用いられるくける技法はみられない。裁ち目のひねり仕立て（細い巻き縫いまたは糊づけ）、衽の縫代で身頃の縫代をくるむ仕立てなどもみられない。しかし、衽つけの袋縫いなど本土の時代衣装の単衣の縫製方法と類似している技法も多い<sup>14)</sup>。

神衣の単衣では、布幅をいっぱい使うことが原則で、縫代を最小限にとり、裾や衽下などの裁ち目は非常に細い三つ折りにして、ぐし縫いしてある。細くて高級な針と太さが均一な糸を用いて、非常に精緻な縫目で仕立てられている。王府の工房の専門の職人によるものと思われ、高度な技術を習得していたことが見てとれる。

表 1 大袖衣の寸法 (cm)

身丈	袖丈	袖幅	脇幅	肩幅	後幅	前幅	衿肩 あき	衿下 がり	衿幅	衿下	衿幅	
琉球土族中年婦人の標準寸法	124	55	28	5	34	34	7.5	8	17	22	14	* 文献 a
伊平屋村・名嘉家 伊平屋あながしの色神衣裳	159	67	55	なし	55	48	9	10	45	28	17	紅の緞子に刺繍を施したあしやげこむね 約500年前のものを沖縄県立博物館の展 示用に復元したもの * 文献 b
久米島・君南風伝来衣裳 平絹地単衣	140	53.5	35	8	40.5	41	6.5	9	20	33	19.5	約200年前の8代目君南風 (きみはえ) : 久米島の最高神) の大袖衣 薄黄色で背に鶴亀の紋織 * 文献 c
久米島・桃原家ノロ衣裳 芭蕉布表衣	125	54.5	29	4	42.5	41.5	5	9	28.5	15.5	16.5	約150年前のノロの大袖衣 クール染 * 文献 c
久米島具志川村兼城・新城家神衣裳 芭蕉平織濃紺大袖衣	128.5	56.5	39	9.5	39.5	39	8	10	19.5	36	17	* 文献 d
奄美市名瀬・大津家 広袖朝衣 (奄美博物館)	160	62.5	42	13.5	42	42	9.5	14	18	36	9.5	濃紺絹芭蕉交織袴衣 1805年御目見え衣裳 (男物)
宇検村屋鈍・吉野家 芭蕉白地平織長衣神衣裳	120.5	63.5	-	6.5	37	37	7	14	19.2	20	7.6	年代は不明だが、吉野家には1594年 (万 歴22年) のノロ辞令書が伝わっている * 文献 e
宇検村 芭蕉無地平織神衣裳長衣	112.5	63	-	7	33.5	32.5	8.5	15	13	29	16.5	* 文献 e
瀬戸内町久慈・益村家 絹平織流水樹木花葉型打広袖表着 (瀬戸内町郷土館)	136	79	36.8	あり	35.5	-	-	-	-	20	7.5	型付の模様、飾り紐、二目落としなどの 装飾がある * 文献 f
喜界町大朝戸・新山家 芭蕉大袖衣 (喜界町民俗資料館)	130	61	40	5	40	41	7	16	25	40	10	
喜界町蒲生・栗島家 絹単衣大袖衣 (喜界町民俗資料館)	130	60	45	なし	45	45	7	9	30	16	15	金茶色紋織、羽衣伝説の天女の飛衣とし て伝承、18世紀中頃のもののか、
奄美市名瀬・大山家 ノロの神衣 (黎明館)	115	50	31	5	31	31	8	17	13.5	31	15	芋、収蔵品番号06-000059
奄美市名瀬・大山家 ノロの神衣 (黎明館)	118	48	31	13	30	30	7.5	22	12.5	33	14.5	芋、収蔵品番号06-000060

文献 a : 琉球王家伝来衣裳刊行委員会『琉球王家伝来衣裳』p. 280講談社 (1972年) b : 寺田貴子・植木ちか子「沖縄県立博物館紀要」No. 2, p. 27-35 (2009年)  
 c : 橋本千栄子「大谷女子短大紀要」25号, p. 133-165 (1982年) d : 片岡清, 植木ちか子, 上運天綾子「琉球大教育学部紀要」第56集, p. 181-202 (2000年)  
 e : 沖縄県史技術史織染編専門部会『奄美のノロ遺品調査報告書』p. 8-13, 沖縄県立図書館 (1996年) f : 下野敏見「沖縄文化研究」28号, p. 1-112, 法政大学  
 沖縄文化研究所 (2002年)



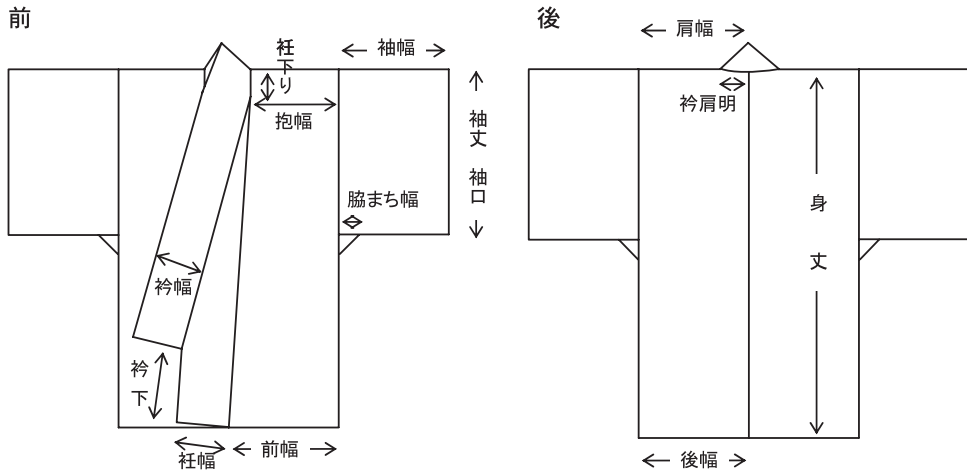


図4 大袖衣の構成と部分の名称

#### 4. 奄美の大袖衣

##### 4-1. 奄美の神衣

奄美のノロが祭祀のときに着用する衣装を神衣（かみぎん）という。上衣に胴衣，下衣に下裳を着て，上から表着を打ち掛けるという組み合わせである。狭義には，一番上に着用する表着を神衣と呼ぶ。表着は，広袖・対丈である。

ノロの辞令書と衣装が琉球から下賜されたのは15世紀末から薩摩藩侵攻までである。その間の衣装は琉球の服制に倣い，王府の工房で製作されたものであろう。奄美のノロの大袖衣は白であると言われているが，華やかな色衣装もあったのではないと思われる。現在まで伝わっているもの（製作年代が比較的新しいもの）はほとんどが白であるが，さらに調査研究が必要である。琉球王府から，高位のノロには高価な中国の錦や手間のかかった琉球刺繍の衣装が下賜されたが，それ以外のノロには代用の絵がき御羽（えがきみはね）であった<sup>15)</sup>。絵がき御羽は，型染め，型付，あるいは手描きで模様を描いた表着である。模様つきの色衣装であることは明らかであるが，胴衣か大袖衣かは文献<sup>16)</sup>によって異なることから，様々な種類があったと思われる。喜界町阿伝の勇家に伝えられていたノロの遺品について，

「一時代前までは，首里王府から交付された「絵がき御羽」と稱する神羽も遺ってゐたとのことである。」<sup>17)</sup>

という記述がある。一時代前とは，明治初期のことであろうか。また，瀬戸内町郷土館の大袖衣（白地に型付で模様が染めつけられている），後述する喜界町民俗資料館の羽衣や濃藍芭蕉大袖衣など，白の無地ではない大袖衣も残っている。

薩摩藩侵攻以後は，かつて琉球からもたらされた古い紋織物や錦の衣装をリメイクしたもの，奄美で織られた布を用いたものになっていったとされている<sup>18)</sup>。胴衣については，仕立て直しのあとが残るもの（写真1-2）や，三角形にパッチワークしたハブラ胴衣（または，ハビィラハギ胴衣。ハビィラは蝶のこと）（写真1-3）があるが，大袖衣につ

いては繰り回しは考えにくく、島内で織られた布を用いたものが多いと考えられる。（ただし、後述する喜界島の羽衣のような例外もある。）

さらに時代が下がり、本土の影響が大きくなると、胴衣・下裳ではなく、長着の上から大袖衣を着用するようになった。現在の祭事では、長着の上から神衣裳と呼ばれる白の単衣（綿、ポリエステル）を羽織っている。袖幅・身幅ともに一幅で徐々に狭くなり、大袖というよりは広袖となっていた。実用性のない袖の部分に貴重な布をふんだんに使うことは、庶民の服装と差別化し、ノロの権威づけや祭祀の華麗さを意図したものであろう。しかし、ノロが大袖衣をまとった姿は、『南島雑話』の挿絵や昭和になってからの写真が残るのみであり、琉球王府のもとで営まれていた祭祀の荘厳さを知る手掛かりが乏しいのは残念である。

#### 4-2. 奄美の礼服と仕立て方

奄美で広袖の朝衣が礼服であったのは、琉球の服制に倣ったものと考えられる。薩摩藩は、奄美群島の島民に対して本土風の服装を禁じ、上国する場合にも和装ではなく琉球風の服装をするように定めていた。1691（元禄4）年から始まった薩摩藩参府で藩主に御目見えする時の衣装は袴ではなく、大袖の朝衣であった。『南島雑話』<sup>19)</sup>によると江戸時代末期の広袖・対丈の着物には次のようなものがあつた。

朝 衣：役人が着用する官服、極上の生芭蕉の濃紺の袴衣（とうい）、袖丈42～45cm  
（写真1-4）

タナベ：役人の妻の正装、白の極上生芭蕉で朝衣と同様の袴衣、帯なしで打ち掛けて着る  
大 袖：婦人の礼装、袷、紬や木綿、花織や無地、袖丈48cm

サロシ：婦人の乗馬服、晒が転じたものであるとすれば麻製か

着装法としては、帯は締めずに、打ち掛ける。これは、気候に合わせたものであり、琉球の着装法の影響もあるだろう。礼服に用いられる素材は袴衣といい、極上の生芭蕉（なまばしや）を砧打ちして艶をだしたものであつた。芭蕉の幹は繊維が年輪状になっていて、外側ほど繊維が太く、通常は灰汁で煮て繊維を取り出す。芭蕉の幹の中心に近い部分から生のままで繊維を取り出したものが生芭蕉であり、絹芭蕉、一斗芭蕉とも呼ばれた。生芭蕉をとるのは高い技術が必要で、10人に1人しかできないほどであり、繊維百匁が米一斗と交換できたとされている<sup>20)</sup>。

奄美における着物の仕立て方は琉縫いであるが、物差しもなく、手を広げた幅で長さを測り、体に合わせて身丈を見積もるか、あるいは、既存の着物を基準にしていた。部分の寸法という概念がなく、布幅いっぱいを使うことを基本としていた。従って、布幅の変化によって袖幅や身幅が変化した。

本土において、布幅は規格化されたものではなく、時代や地域により異なっていた。地機を用いる場合は、布幅はおおよそ腰の幅（約30cm前後）に限定される。高機では、広幅も織ることができる。古墳時代にはすでに大陸から高機が伝えられていた。奈良時代には布幅は一定ではなかったが、庸調として納める布の量は、絹布は約65cm幅、苧（からむし）は約71cm幅で計算されていた。平安時代中期に有職故実が確立すると、装束地の布幅は45cmとなった。江戸時代初期の小袖で、布幅40～45cmであった。しかし、小袖の身幅が徐々に狭くなっていくと、布端を裁ち落とす（または縫いこむ）必要があり、現在の標準であ

る36cmになっていった<sup>21)</sup>。

琉球および奄美の大袖衣の寸法をみると(表1), おおよそ, 古いものほど布幅が広く, 袖幅・身幅も広いことがわかる。奄美の大袖衣は, 布幅いっぱい仕立てるのが基本であり, 古いものはかなり広幅の布を使っている。縫い目が非常に細かく, 専門の職人の手によるものである。時代が下がり, ノロの代替わりの折に新しく仕立てられたものは, 大袖衣と言っても, 袖幅が30cm前後のものもある。布幅が狭くなったことと併せて, 內衣が胴衣・下裳から小袖の長着に変わったことにより, 身頃の幅をそれ程必要としなくなり簡略化されていったのであろう。

#### 4-3. 奄美に伝承されている大袖衣の調査

これまで奄美群島で調査した大袖衣の中から, 代表的なもの4点について報告したい。(1)の朝衣はノロの衣装ではないが, 奄美の最上級の礼服であること, 製作年代や由来が明らかなことから取り上げることにした。

##### (1) 広袖朝衣

奄美市立奄美博物館に収蔵されている広袖朝衣は, 奄美市名瀬小宿の天津家に伝えられたものである。箱書きには,

「文化二年丑歳十二月吉日 御目見衣装并廣広帯入 大島倭濱方与人佐和郁」(写真5-1)とある(文化二年は1805年)。広帯は失われている。箱裏には, 若殿様が斉興の名を拝領し従四位下豊後之守に叙せられた折に, 祝儀に薩摩に上国して登城しお目見えしたとある<sup>22)</sup>。『南島雑話』<sup>23)</sup>に

「朝衣といへる官服あり。極上々の芭蕉素を以て至て細密に績みたるを素のままに数篇, 藍にて五日計り, 飽くまで染めて, 織調へ類族集まりて替る々々禱衣すること二, 三昼夜なり。成就になりたるは其光沢恰も靚目が如し。是を広袖の大袖に縫調へ広帯をするなり。」と説明されている通りの朝衣である。ただし, 経糸に絹, 緯糸に生芭蕉が用いられている(写真5-2)。芭蕉糸は, 機結びであるが, ところどころに撚りつなぎも見られる。機結



写真5-1 広袖朝衣と箱  
(奄美市立奄美博物館)

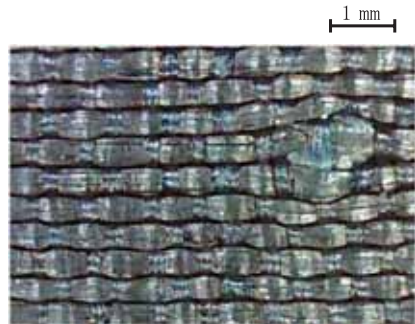


写真5-2 広袖朝衣の織物組織  
(奄美市立奄美博物館)

びの部分は織り上げてから糸端を処理して、さらに、砑打ちしているため、目立たない。あくまでも、薄くしなやかでなめらかな布に仕上げようとする意図が見て取れる。色も非常に濃い紺色で光沢がある。布幅約44cmであり、大島内に、高密度で広幅の織物を織ることのできる織機と製織技術があったことがわかる。仕立てについては、琉縫いで、非常に細い縫糸（芭蕉糸と思われる）を用いて細かい縫い目である。寸法（表1）は、着丈が長く、袖幅・身幅が非常に広く、たつぷりと着つけて広帯をしめていた姿が想像できる。

## （2）芭蕉大袖衣（喜界町民俗資料館）

喜界町指定有形文化財である大朝戸新山家に伝わるノロの遺品に、打掛と称されている芭蕉大袖衣（写真6-1および6-2）がある。素材は、経緯とも非常に細く上質な生芭蕉である。寸法は表1に示す通りで、布幅はやや広く約40cmである。かなり古い年代に織られたものと思われ、虫食い等の損傷が著しい。一般に、芭蕉に虫害はないと言われていたため、さらに考察が必要である。芭蕉糸はほとんど撚りがなく、機結びの結び目は織り上げた後で処理していると思われ、目立たない。部分的に撚りつなぎもみられる。仕立て方は、広袖で、脇まちがつき、袖口は耳のままで始末していない。背縫いは一度縫いである。上質の縫糸で、細かな針目で縫製してある。縫代の幅も最小限であり、神衣の規定通りの仕立て方である。製作年代は特定できないが、古い時代の大袖衣の特徴を全て備えている。喜界町民俗資料館には、濃紺の藍染芭蕉大袖衣も収蔵されている。損傷が著しく、寸法は測定できなかったが、広幅の布を用いたものである。これがノロの衣装か、朝衣か定かではないが、ノロの衣装であれば、祭祀には白衣装、私用の外出等には紺の衣装という使い分けをしていたことがわかる資料である。

## （3）絹単衣大袖衣（羽衣）（喜界町民俗資料館）

奄美群島各地には天人女房譚（羽衣伝説）が伝えられている。喜界町蒲生にも天女が舞い降りたという伝説がある。（詳細については、竹内譲『喜界島の民俗』黒潮文化会、1969年、などを参照）天人の子孫であるとされている栗島家には、天人の位牌（天人が飛び立った日として1684（貞享元）年2月19日と記されている）のほか、天人の遺品として、絹大袖衣（羽衣）1領、簪（鯨の骨）2本、木櫛1枚、髪飾り（白孔雀の羽根）3本、銅鏡1



写真6-1 芭蕉大袖衣の背縫い部分  
（喜界町民俗資料館）

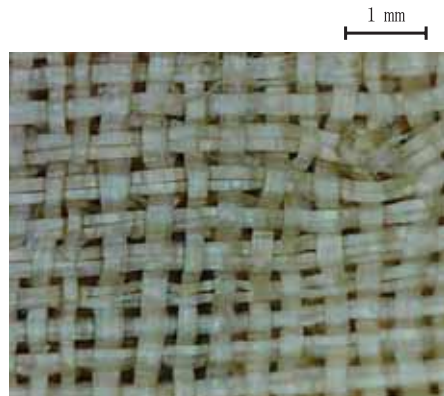


写真6-2 芭蕉大袖衣の織組織  
（喜界町民俗資料館）

枚などが伝わっている。現在は、喜界町民俗資料館に収蔵されている。これらは、ノロの遺品とみられるものであり、1815（文化12）年に82歳で亡くなったノロが使用したものだと考えられている<sup>24)</sup>。

羽衣とされている大袖衣の素材は、金茶色の絹紋織で、布幅が非常に広く（約47cm程度）、左袖と右衿先（約59cm）は紗綾型に花紋、その他は菱形紋で、いずれも和風の文様である。2種の布が用いられているので、別の着物を仕立て直したものかもしれない。また、色がほとんど同じであることから、白生地を同時に後染めした可能性もある。『喜界町誌』<sup>24)</sup>によれば、

「羽衣と伝えられる着物は栗島家に代々傳承されているもので、時代は不明だが襟のつけ方などから桃山時代以前の貴族階級が着用したものと推定され、布地は中国またはインド産といわれて織物史上貴重な資料といわれている。（『喜界町見てある記』）」とある。布幅は平安後期以降の装束地と同様であり、本土の貴族の內衣であった単（ひとえ）あるいは琉球王族の內衣を仕立て直したものとしても矛盾はない。ただし、明との貿易が盛んだった頃には、中国の高級な織物が盛んに輸入され貴族の衣装に用いられていたが、徐々に国内でも生産されるようになっていったので、外国製か国内製かは詳細な分析によらなければ判断できない。

寸法は表1に示す通りで、袖幅・身幅ともに広い。仕立て方として、縫代は非常に細く、5mmに満たない幅であり、袖幅や身幅は布幅いっぱいに使っている。衿下や袖口は耳をそのまま使い、裾や衿端は細かい巻き縫いである。上前衿下は耳のまま、下前衿下は細く三つ折りしてぐし縫いしてあることから、鉤衿裁ちであることがわかる。縫目が非常に細かいことから、明らかに専門の職人による縫製である。

衿のない対丈の芭蕉衣1枚で過ごしていた庶民（貧しい農民であれば粗芭蕉衣で）にとつて、薄くしなやかな絹織物は別世界のものであり、ゆったりとした衣を帯なしで打ち掛けて着ると、風をはらんで飛び立ちそうに見えたのではないかと思われる。天女の飛衣（とびぎん）であったのか、また、飛衣をまとして天に去っていった天女が残した着物であったのか定かではないが、羽衣伝説と結びついたのも納得できる。

別の推論として、18～19世紀に琉球の組踊の衣装が喜界島に伝わったものとも考えられる。18世紀に成立した琉球の組踊りの代表作のひとつに「銘刈子（めかるしい）」がある。羽衣伝説をもとに創作され1756年には演じられた記録がある。天女の夫の名前が銘刈子である。天女の衣装は

「垂髪、紫長巾〔ひれ〕<sup>注13)</sup>、作花並金銀水引、熨斗紙差天冠、琉縫薄衣装、飛衣、緋紗綾足袋、金銀薄磨之柄杓」<sup>25)</sup>

となっている。ここで、琉縫薄衣装と飛衣のデザインは不明である。現代の組踊りの羽衣の衣装は紅型の琉装で、飛衣は衣というよりも幅の広い薄地のひれとなっている。中国の冊封使を接待するための芸能の衣装が仕立て直しであることは考えにくく、琉球の組踊の衣装が伝わったものである可能性は小さいと考えられる。

注13 ひれ（領巾または比礼）：古代衣装である衣裳（きぬも）の肩にかけて長くたらし細長い薄布のことで、呪力をもつとも言われており、奄美のサジと同様である。





写真7-1  
絹大袖衣（羽衣）の下前の衿先部分  
（喜界町民俗資料館）

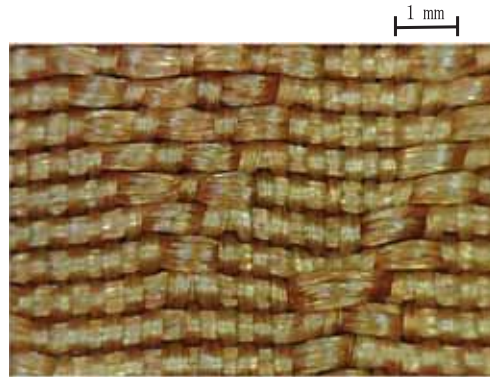


写真7-2  
絹大袖衣（羽衣）の菱形紋の織物組織  
（喜界町民俗資料館）

また、琉球で、袖を羽に見立てて胡蝶形（はべるがた）や蜻蛉形（あけずがた）と称し、後者の神羽を蜻蛉羽衣（あけずばにん）としていたことに由来するかもしれない。他にもノロの神格化を図るため、天人の子孫であると称したという説もある。

#### （4）ノロの神衣大袖衣（黎明館）

鹿児島県歴史資料センター黎明館には、ノロの神衣であった大袖衣が2点収蔵されている（収蔵品番号06-000059および06-000060）。2点とも1970年に奄美市名瀬小宿の大山キクさんから寄贈されたもので、ノロであった祖母の遺品である。ノロの代替わりごとに新しい衣装が製作されたとなると、明治中期以降のものではないかと思われる。表1に2点の寸法を示す。写真8-1～8-4は収蔵品番号06-000059である。

素材は、いずれも苧であると思われる。糸は細いものの、太さのむらがあり、糸密度は粗い。ノロの神衣は八重山の上布で製作されたという言い伝えもあるが、上布ほど高級な布ではないと思われる。大袖ながら、布幅は約33cmで、現在の並幅に等しい。仕立て方は、琉縫いであり、衿付けと袖底は袋縫い、衿先と裾は細く三つ折りしてぐし縫い、袖口と右身頃の衿下は耳のまま、左身頃の衿下は三つ折りでぐし縫いである。縫糸は木綿の紡績糸が用いられている。

明治中期は、奄美の衣生活が大きく変わった時期である。素材が芭蕉から木綿になり、和裁が普及し、一般の着物は本土の仕立てと変わらなくなっていった。その時期にあっても、ノロの衣装は伝統的な琉縫いが受け継がれていたことがわかる。

#### 5. まとめ

奄美群島の大袖衣は年代により素材や寸法が変化していったが、仕立て方は琉縫いであり、琉球の神衣の縫い方に則っていたことが明らかである。古い時代には、胴衣・下裳の上から打ち掛けていたため、身頃のボリュームが大きい。関節でないため、動作に適応するには身幅が必要である。部分を誇張することによるデザイン効果ではなく、全体を誇張してノロの存在を大きく見せる効果があったと思われる。装飾品である玉ハベラを背中に垂らすという着装法についても、祭祀では後ろ姿が目立つことや、後身頃のアクセントに



写真 8-1 ノロ神衣大袖衣  
(黎明館 収蔵品番号06-000059)

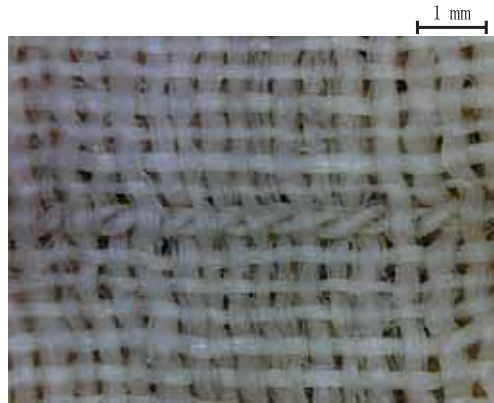


写真 8-2 ノロ神衣大袖衣 織物組織  
(黎明館 収蔵品番号06-000059)

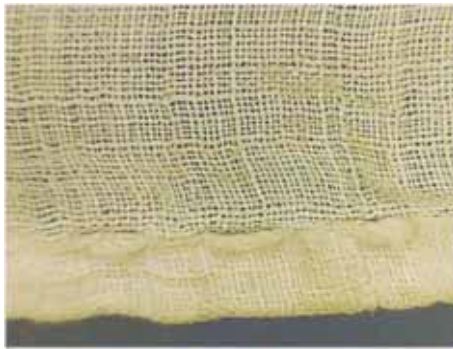


写真 8-3 ノロ神衣大袖衣  
裁ち目のしまつ (三つ折りぐし縫い)  
(黎明館 収蔵品番号06-000059)



写真 8-4 ノロ神衣大袖衣  
単衣広衿の琉縫い衿つけ (袋縫い)  
(黎明館 収蔵品番号06-000059)

なることが要因であるとするれば、納得できるものである。また、大きな袖の動きは、座って祭祀の動作を行う時の美しさを際立たせるものである (写真 4-1, 4-2)。錦の胴衣に白の大袖衣をまとい、種々の装飾品を身につけたノロの姿は、天女にも例えられたであろう。琉球時代の華やかさに比べ、薩摩藩侵攻以降は神衣のルールを守りながらも徐々に簡素なものになっていった。本土の長着が広まり、大袖の布幅が狭くなるとともに、現在の神衣装に近づいていった。一方で、装飾品であるザバネ、玉ハベラ、首飾りなどは古式が守られ続けてきたと考えられる。

本報では、主に大袖衣の寸法と縫製を中心に考察した。さらに、色や素材についても検討する必要があるが、それだけでなく、衣装と装飾品を身につけたノロの姿に奄美独自の様式美があることを明らかにしていくのが課題である。

## 謝 辞

貴重な資料を調査させていただいた奄美市立奄美博物館、瀬戸内町郷土館、喜界町民俗資料館、黎明館に感謝の意を表します。

## 文 献

- 1) 下野敏見『奄美、吐噶喇の伝統文化 祭りとノロ、生活』p. 82, 南方新社（2005年）
- 2) 先田光寅「宇検村内のノロ遺品」南日本文化27号, p. 1～24（1994年）
- 3) 鹿児島民具学会『鹿児島民具博物誌 かのしまの民具』p. 358-359, 慶友社（1991年）
- 4) 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』p. 34, 岩波書店（1982年）
- 5) 草間みち子「女子服装変遷に見る袖の形態について」東京家政大学生生活科学研究所研究報告第3集, p. 13-28（1980年）
- 6) 渡口文子『わたしの琉装研究』p. 14-29, 私家版（1985年）
- 7) 沖縄県教育庁文化課（編）『沖縄県史料調査シリーズ第1集, 沖縄県文化財調査報告書第126集 沖縄の染織（Ⅰ）染織品編』沖縄県教育委員会, p. 25～26（1997年）
- 8) 岩崎雅美「垂領・大袖の衣を着る人々—僧侶と宮廷人を中心に—」奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol. 18, p. 78-101（2008年）
- 9) 片岡淳, 植木ちか子, 上運天綾子「兼城の神女・せのきみ服飾遺品の考察」琉球大学教育学部紀要第56集, p. 181-202（2000年）
- 10) 橋本千榮子「琉球の服装について—神女の衣装—」大谷女子短期大学紀要25号, p. 133-165（1982年）
- 11) 4) と同じ, p. 31-37
- 12) 寺田貴子, 植木ちか子「琉球神女衣装の製作について」沖縄県立博物館紀要No. 2, p. 31-33（2009年）
- 13) 辻合喜代太郎, 橋本千榮子『琉球服装の研究』p. 90-93, 関西衣生活研究会（1991年）
- 14) 栗原宏, 河村まち子『時代衣装の縫い方』p. 103-108, 源流社（1984年）
- 15) 伊波普猷『沖縄女性史』p. 287-288, 平凡社（2000年）
- 16) 『写真集 望郷・沖縄第5巻』p. 91, 本邦書房（1981年）
- 17) 伊波普猷『をなり神の島』p. 280, 楽浪書院（1942年）
- 18) 1) と同じ, p. 1-24
- 19) 國分直一, 恵良宏（校注）『南島雑話2』p. 35, 平凡社（2007年）
- 20) 長田須磨『奄美随想 わが奄美』p. 181, 海風社（2004年）
- 21) 角山幸洋『日本染織発達史』p. 192-193, 田畑書店（1968年）
- 22) 弓削政己（他）『海の織道 奄美・鹿児島・久留米編』p. 117, 海の織道実行委員会（2005年）
- 23) 19) と同じ, p. 31-21
- 24) 喜界町誌編纂委員会『喜界町誌』p. 945-946（2000年）
- 25) 伊波普猷『沖縄女性史』p. 238, 平凡社（2000年）